あ と が き

副校長　　武 西 良 和

私たち実践人は常に、子どもたちが生き生きと学習に取り組む姿を想像している。そんな姿にしたいと日々実践研究に取り組んでいる、はずだ。

例えば、話し合い活動。集団の中で子どもに話させようとすれば、子ども自身がいくつかの話せる材料、あるいはもっと積極的に話したい内容をもっていなければならない。いくつかの内容をもつためには、調べたり読んだりして、書く時間がいる。その時間がそれぞれの子どもの、話し合いへの弾みをつけるために大事なのだ。その時間を充実させないで、後の話し合いの時間が充実するはずはない。

その子どもたちの一人学習の中で、一人一人の学習の仕方を教師が見たり、教師が子どもと相談したりしながら知っていく。「その場合はこうやってごらん」「そこはこう考えてみよう」などと教師の指導の言葉がタイムリーに入っていく。

話し合い学習の中で教師は一人一人の表現の仕方の個性を知ったうえで、「そこはこんな風に話してみれば」と言う場合がある。また、話し合う途中で、「今話しているのを聞いていると、Ａ君の問題は解決できましたね。」と言ってＡ君に話しかけたり、Ｂ君が発言した直後、「今、Ｂ君が話したことは、今まで話してきたこととはちがった方向から考えているのが分かりますか。」などと言ったりして子どもたちに投げかける。

一人学習や話し合い学習の中で、そのようなこまやかな指導を続けていくと、以前の指導をしなくとも子どもができるようになっていることが増えてくる。この子はこんな事はもう言われなくても出来るようになっている。あの子は話し合いの中で、分かったことを取り入れて自分なりの方法を発明して書きまとめている。そんなことを自覚的に知ること、それが評価なのだ。そういう意味では指導がなければ評価はできないとも言える。

煎じ詰めて、原理だけを言えば、学習は「一人学習」と「集団（話し合い）学習」しかない。ひとり学習と集団学習が交互に行われる。その往復運動の中に子どもの成長があるのだ。

一人学習であろうと、集団学習であろうと、一人一人の子どもの言葉をしっかりとらえた上で、学習活動を進めていきたい。それがとらえられていないようでは、授業は豊かに進んでは行かない。１時間の話し合いをもつのであれば、その２倍も３倍もの一人学習がなければ話し合い活動は息切れし、豊かなものになってはいかないだろう。

子どもは常に伸びようと変化している。昨日の子どもは今日の子どもではない。いや、２時間目の子どもはすでに１時間目の子どもではない。子どもは絶えず変化している。

わたしたちは、「学習文化」という広い考え方で子どもの成長をとらえようとしてきた。子どもたちの学習文化を鋭く、十分にとらえられたのか。あるいは、よりよい方向に学習文化を高めることが出来たのか。そのような問題意識をもってこの紀要を読んでいただけるとありがたい。